

『コロナ禍で今後考えていかなければいけない学校のあり方』



岐阜聖徳学園大学教授
たまおき たかし
玉置 崇氏

コロナ禍がきっかけしたこと

最初に、自己紹介として私が中学校長だった時のことを話させてください。ある時、生徒が、「校長先生のポスターを作っても良いですか」と言ってきたのです。そして、彼らはいろいろ調査をして「校長先生と言えよ」という題で私のポスターを作ってくれたのです。その最初に書かれていたのが「A B C Dの法則」でした。この言葉は「A―当たり前のことを、B―馬鹿にしないで、C―ちゃんとやれる人こそ、D―できる人」という意味で、入学式の時からよく子どもたちに話していました。このように分かりやすく簡潔に表現してあげると一発で覚えてくれるのです。

担任の先生方もよく帰りの会などでそのまま使ってくれました。また、私のゼミ生が近くの学校に教育実習に

行った時に、私も挨拶に訪れたのですが、廊下に大きく「A B C Dの法則」と書いて張り出してありました。いつの間にか私の言葉が広がって大変有り難いことでした。

さて、そんな校長時代にも様々な問題がありました。もしこのコロナ禍で、自分が校長だったら本当に大変だろうと思います。

では、今日のお話の一つめとして、「コロナ禍が突きつけた学校のあり方」について話していきたいと思えます。

まず、約三か月休校になったことで、これまで学校がどんな保障を提供してきたかということが明らかになりました。この話をする、「学力保障のことか…」と思われるかも知れませんが、それ以前にまず「健康保障」です。先生たちは学校に来た子どもたちを見て、「元氣そうだな」「不安そうだな」「今日は落ち込んでいるなあ」など、心身の状態を確認してくれるわけです。

それから「つながり保障」です。つまり、先生と子どもたちのつながり、そして子ども同士のつながりが学校では保証されているのです。

けれども、コロナ禍によってこのような学校の大切な機能が奪われてし

まったのです。

とくに「つながり保障」については立教大学教授の中原 淳氏は、コロナ禍で休校になった約三か月の間で、高校生が一日平均どれだけの時間学習したのかを調査して、その結果を次のように発表しています。

コロナ休校に入る前の学校生活について「楽しんでいたか」という質問に対して、「楽しんでいた」と答えた生徒は一日平均二時間十七分学習していました。一方、「楽しんでいなかった」と答えた高校生は平均一時間四十分の学習時間でした。ここから分かることは、普段の学校生活をどのように送っているかによって、休校になった時の勉強時間に差があったということです。

それから、「学校で他者との関係が築けているか」という質問に対して、「築けている」と答えた生徒たちは、休校期間中に平均二時間二十二分の学習をしていました。それに対して「築けていない」と答えた生徒の平均は一時間二十五分でした。五十七分の差があったのです。

そして、私がかつとも驚いたのが、「休校中に教員とのコミュニケーションが取れていたかどうか」という調査

です。「取れている」と答えた生徒の平均の勉強時間は二時間三十五分でした。一方、「取れていない」と答えた生徒の平均学習時間は一時間五十四分で、その差は四十一分だったのです。

実は、コミュニケーションが取れているといってもたいした時間ではなかったのです。Zoomなどでリモートの朝の会をやって、「みんな元氣か」といったような短い声かけをするだけでも学習時間に差がついたのです。

しかし、多くの小中学校で最も力を注いだのは、先生たちが学習プリントを印刷して一生懸命自宅に届けることでした。これはものすごい努力です。

でも実際は、子どもたちはそれほど学習をやっていないのです。四月に学級づくりも出来ておらず、担任との「つながり」もできていない状態では子どもたちは気持ちが入らないのです。ですから、オンライン授業の動画で先生が一生懸命話していても、「この人は誰だろう」という感覚で子どもたちは見ていたわけです。

この調査から、学校の先生と生徒たちはしっかりと繋がっておくべきだと思います。それが明らかになったのです。ですから、もし第二波が来て再び休校措置

になったとしても先生と子どもたちがしっかりと繋がっていくことは学校に与えられた大きな役割であると強く感じています。尚、この中原 淳氏の調べたデータは、新しい学習指導要領を作成していく会議の基礎資料にもなっています。

オンライン化に対する 国と教育現場の温度差

全く話は変わりますが、国は「GIGAスクール構想」といって一人一台のパソコンと高速のネットワークの設置を進めるために大きな補助金を出しました。実は、私もこれを推進するためのアドバイザーとして様々な場所に関わっており、多くの自治体の議会ではすでに予算案が通っていると聞いています。このように、着実にICT、オンライン化の流れが来ています。

ところが、多くの学校現場ではこの方向とは逆のことが起こっています。近くの学校で教員をしている私の元ゼミ生が、「Zoomで朝の会をやりたいんです」と言うので、「やったらいいじゃないか」と助言しました。けれどもその学校の校長は、「ダメだ。全部の

家がインターネットに繋がっていないじゃないか」と言ったというのです。

でも、一〇〇%なんていうのは無理です。八〇%しか繋がっていないのであれば、その八〇%とオンラインで繋がって、残りの二〇%は別のやり方で工夫していけばいいじゃないですか。そもそも、これまでの学校教育で本当に公平性を保ってきたのかというと、

そうではないと思います。ところが、このような緊急時になると急に、「全員が同じように出来ないのだめだ」という平等論を言い出す人がいるわけです。けれども一方で、「うちの学校だけでもオンラインでやろう」と言って、果敢に取り組もうとされた校長先生もおられました。ところが、今度は市民の方から教育委員会に、「あそこの学校だけオンラインをやり始めたけどそれでもいいのか」と言ってくる人が出てきたのです。その結果、教育委員会からその学校に「やめなさい」という通達が来たというのです。

私はこのようなことを聞いた時に、とても残念な気持ちになりました。多くの現場では、「横並びじゃないといけない」というのが標準的な考えになっているようです。

このような実態が次第に文部科学省にも伝わってきて、先日はオンラインで次のような思い切った発言をされていました。

「今は前代未聞の非常時であるのに危機感がない。オンライン学習は学びの保障に役立つにも関わらず、多くの学校で取り組もうとしない…。なぜ使おうとしないんだ。使えるものは何でも使っていじやないか。出来ることから出来る人からやったらいい。既存のルールにとらわれず臨機応変にするべきで、ルールを守ることが目的ではないはずだ」

また、次のようにも言っていました。「何でも取り組んでいくのは良いことだ。現場の教職員の取り組みを潰すべきではない」

こうした文科省の動きもあり、学校でオンライン授業が全然進んでいない一部の自治体では、保護者の方から要求が起こってきています。

コロナ時代の教師の役割

私はいろいろな学校で授業改善のお手伝いもさせてもらっています。そこで分かったことは、新しい指導要領の

根幹となる「主体的、対話的で、深い学び（アクティブラーニング）」がコロナ禍のためにほとんど実践されていないという現状でした。

どういふことかと言うと、多くの学校現場では、密を避け、飛沫を防ぐためにはそんなことは出来ないと思われているのです。せつかくこれまで、子どもたち同士が話し合うなどして学びを豊かにしてきたのに、全員が黒板の方に向けて教師の説明を聞くという十何年前のスタイルに戻ってしまっているのです。しかも、授業は遅れているので、先生方の説明はどうしても速くなります。

それが非常に残念で、何とか方法はないのかと思つて、子どもたちを見ていました。すると、マスクをしていても子どもの様子や表情、つぶやきは分かるわけです。だったら、それらを読み取って先生たちの方が、問いかけたり、揺さぶったり、発言を促していけばいいのです。

「何か分かったみたいだね、ちよつと聞かせて」

「〇〇さんの言ったことについてあなたは どう思う」

「どこからそう思ったの」

「以前あなたが言ったことをもう一度言ってみて」

「今の〇〇さんが言ったことをもとにもう一度考えてみて」

このように、子どもが教科書など学びの中で見つけたことを繋いだり、揺り戻したりしていくことは、マスクをしていても、ペアワークやグループワークをしなくても出来ることだと思います。そして、こういったことこそ、コロナ禍でも出来る、教師ならではの大切な役割だと思ふのです。

そして、子どもを見ていれば学習についてきているか、興味を持っているかは当然わかるはずですから、教師は是非その感受性をこれまで以上に磨いていく必要があるわけです。

今、私は様々なところで一生懸命このことを発信しています。

今こそカリキュラム・マネジメント

では、私が考えている「コロナ禍の今だからこそやらなければいけないこと」について少し提言させていただきます。それは、カリキュラム・マネジメントです。

カリキュラム・マネジメントとは簡

単に言う、「今までやってきた学校のあり方をもう一度見直して、本当に意味があるものかどうかを考えて再構築しましょう」ということです。

現場では、何をしたら良いか分からない、段取りが出来ていない、可視化できていない、分析ができていないといったことが起こっています。

それで、これは私が作った言葉ですが「思い込み業務」の洗い出しをしていくことがまずは大事だと思つています。つまり、「それほど効果や必要性がない仕事を思い込みでやっていることはないですか」ということです。

これは私が校長時代の出来事なのですが、その学校には七十年近く続いている学校新聞の発行という仕事がありました。周りの先生方に聞いてみると毎年教員で分担をして作っていて、なかなか大変な仕事だということです。

それで私は、「学校新聞はやめよう」と言いました。すると、先生方からは「本当にやめてもいいのか」という声が聞こえてきましたし、教頭先生は、「地域や保護者からきつと苦情が出ると思いますよ」と言われました。

それで私は、「では、苦情が出てきたら私の方で作りますから、それまで作

らないでおきましょう」と言つて一旦やめたのです。ところが、一年が過ぎても誰も何も言つて来ませんでした。つまり、学校新聞は「思い込み業務」だったわけです。

それから、ある年は雨続きで体育大会の練習がほとんど出来ず、本番の前日に全体練習が一回出来ただけでした。それまでに比べたら五分の一の練習量です。体育科主任からは、今年も期待できないという話も聞いていました。

それで体育祭の当日、私は生徒たちに向かって、「全然練習できなかったけれども、君たちなら気持ち一つで出来るはずだ」と言つて激励しました。すると、驚いたことに子どもたちは例年と変わらない素晴らしい姿を見せてくれたのです。要するに気持ちだったのです。この時思つたのは、体育大会の準備には多くの日数が必要だということでは単なる思い込みだったということ

です。もちろん、それまでやってきたことを否定しません。しかし、「本当にそれは効果があるのか」という視点で学校のそれぞれの業務を精査していく必要があると思ふのです。

次の一手のためのヒント

私がどうしてもこだわるのは児童生徒一人一台のコンピュータの実現です。実現をした暁には、教科書もデジタル教科書に移行していくことでしょう。また、全国学力学習状況調査においても一人一台のコンピュータを活用する方向です。

ご存じの方もおられると思いますが、「学級担任廃止」「定期テストと宿題の廃止」で有名な麹町中学校では、すでに一人一台のコンピュータを導入し、個別最適化学習を推進しています。その子に合わせた問題をコンピュータが出題し、もし間違えばその前の段階の基本となる問題をもう少し練習するように導いてくれるのです。

逆に正解したらその上のレベルのことをどんどん進めていくことが出来るのです。例えば、数学のある単元の学習にこれまで二十時間かかっていたのが、速く出来る子どもは十時間で終わらせて次のレベルにどんどん進んでいくことが出来るのです。

このような報告を見るとやはりコンピュータの素晴らしさばかりに注目がいきがちですが、実は麹町中学校では

協働学習を大切にしています。つまり、子どもたちは分からない時にはお互いに教え合っているのです。やはり、ここに学校の大事な要素があるのです。ですからコンピュータを使った学習だけをすればよいというものではないということも付け加えておきます。

それから、BYOD (Bring Your Own Device) と言つて、「個人所有のコンピュータの持ち込みをしても良い」という動きになると思います。これについては、奈良県が五年後に実施することを打ち出しています。

また、コンピュータを活用して学習型データの管理だけではなく、マイナンバーカードを使って校務型データ（健康診断の記録など）の管理もしていくという国の動きもあります。とにかく全てにおけるICT化が国の流れだと言えます。

ただ、ここで考えておかなければならないのは、実際に一人一台のパソコンが配備された時に、先生方は翌日からそれを使いこなすことが出来るのかということなのです。

そこで、実際に様々な先生方に聞いてみました。すると、次のような回答が返ってきました。

「一人一台のパソコンが入ってきて、研修もないのにどうしたら良いかわからない」「パソコンを使っている先生から学びましようと言われても、授業を見合う時間はどこにあるのか。あの先生とは授業観が違うし：」「パソコンで資料を見せるだけでは意味がないと言われそう」など。

また、校長先生側の心の内も聞いてみました。

「どの教室でも使われることは奇跡的に近いかも」「いずれ教育委員会から稼働率についての調査があるのでそれまでにどう手を打てばいいか：」「パソコンを使えないと保護者からクレームが来そう：」「パソコン活用の指導助言を求められても自分が経験したことがないからできない」など。

やはり、双方から不安な思いが聞こえてきました。

これならやれる！

スクールライフノート

そこで私は、「先生が指導して子どもたちが活用する」という発想を当面は脇に置いて、「子どもたちが入力した情報を教師が見ることから始めていく」

という提言をしたいと思っています。実は私がアイデアを出して作ってもらい、開発されたアプリがあります。それが「スクールライフノート」です。

主な使い方は、アプリを開き、「心の天気」を選び、その日の自分の気持ちを表すイメーজとして、「晴・曇・雨・雷」のいずれかのマークを選んで押すだけなのです。そして、子どもたちが選んだ「心の天気」の一覧を担任はじめ教員が確認出来るようにしてあるのです。操作は非常に簡単で、すでに導入してもらっている学校では朝と帰りに入力しています。

また、「心の天気」について私のゼミ生が、「言葉にならない気持ちを吐き出すことが出来る小さな避難場所」と表現してくれました。まさに押すだけで心が落ち着くのです。

それから、「学びの天気」というものがあります。授業が終わった後で、自分の学習の振り返りとして「晴・曇・雨・雷」のいずれかのマークを選ぶのです。もし、雨のマークが多い授業があれば、先生は自分の教え方を振り返れば良いし、個別に学習指導をするきっかけにもなります。

実は、専門用語で「メタ認知」と言っ

て、自分の思考や行動を客観的に把握し、認識する力を育むことは非常に大切なことです。そういう力がついてくると主体的に学習に取り組む態度が身につけてきます。そのためにはいつまでも他者の評価を受けるのではなく、自分で振り返り、高めていくことが大事なのです。「スクールライフノート」にはそのような力を高める可能性があるのです。

また、最初の方でお伝えしたように、子どもが学校の先生とのつながり意識を持つことは、学習意欲を支えることにもなるわけですから、この点においても「スクールライフノート」は意義あるものだと言えるでしょう。

これならコンピュータに抵抗がある先生でもやり始めることが出来ると思います。次第に子どもたちもコンピュータに慣れてきて、ゼロから一に進めるのではないかと思います。

さて、今日はいろいろなデータをもとにしてお話させていただきました。暗くなる内容もあったかもしれませんが、このような時期であっても私たちは、楽しく機嫌よく仕事をしていくことが大事だと思います。本日は、ありがとうございました。